

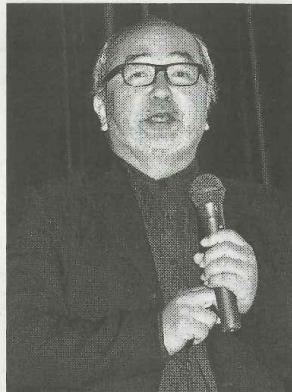
人と自然の関係 どう回復

創造研 後援 総合資格学院

建築の歴史や意匠の素晴らしさと新たな地域性創造につながる「これから建築」を語り合つ場として、2015年から瀬戸内海に面する地域を巡回して開催している「瀬戸内海文明圏建築シンポジウム」（主催・瀬戸内海文明圏「これから」の建築と新たな地域性）創造研究会（後援・総合資格学院）。11月25日に神戸市の神戸大出光ホールで開かれた第4回シンポジウム「瀬戸内ニューライフスタイル」で基調講演した建築家・伊東豊雄氏は、「建築によって希薄になった人と自然の関係をどう回復させるかだ」と問題提起した。

瀬戸内海文明圏建築シンポジウム

伊東氏はます 食堂の内装設計を担当した世界遺産・薬師寺（奈良市）の白鳳伽藍復興プロジェクトについて説明し「田渕俊夫さんが手掛けた壁画には、遣唐使が中国からさまざま文化を藤原京に持ち帰る様子が描かれている。遣唐使は下関から瀬戸内海に入り、大阪に帰つてきた。文化の伝来が瀬戸内海を通じて行われた」と述べ、「瀬



品の家（広島県七日市市）などを紹介。「丹下さんは「私の素朴な機能主義の建築觀は、この廣島の体験によって大きく述べられた」と言っている。同じように並べるのはおこがましいが、わたしも東日本大震災で津波被害を受けた三陸海岸を見ながら同じよつた」ことを考えると振り返った。

また、「わたしが初めて瀬戸内へ手掛けたのが松山I.T.M本社ビル（松山市）。長谷川さんとの作品群に指をくわえていたところ、一六タルトで有名な玉置泰さんに声を掛けいただいたものだ」と話す、「瀬戸内に通うきっかけとなった」という今治市伊東豊雄建築ミュージアム（愛媛県今治市）や、それが建てられ建たれた建築物と話し、健三の広和記念資（広島市）川逸子氏（同）丸小児科（市山市）、川松市）、は寂れてしまった。活動のかい組みを紹介。「大山祇神社が三島の中心的存在なのだが、しまみ街道ができるから、参道ままである決して観光地にしたいわけではない。瀬戸内ならではのの生活方式を語った。

古谷氏「活性化はプロセス共有が重要」

さらに、「わたしは昔から選谷に縁があるが、今まではずいぶん様変わりしてしまった。」これからも多くの超高層ビルが建つらしい。高層化すればするほど自然と人との関係、人と人との関係が絶たれてしまう。現代の建築に課せられたテーマは、自然と人の関係をどうやって回復させるか。震災以降、「みんなの家」を通じてそんなことを考えているが、少しずつ前進しているように思う」と話した。

最後に「2019年は直島で精力的に活動されている安藤忠雄さんにも声を掛けて『瀬戸内建築会議』を開きたい。若いたちに集まってもらい、盛大に開催したい」と構想を語った。

シンポジウムでは、日本建築学会長を務める古谷誠章早稲田大学教授、棚橋修神戸大准教授、坂東幸輔京都府立芸術大講師が講演した。

古谷教授は「住まつこく暮すこと」—四国から見た瀬戸内、本州から見た瀬戸内」をテーマに、広島県にある近畿大工学部で講師、助教授を務めていたころのエピソードを話し「広島には、東京にない豊かさや穏やかさがあった。四国では自然環境との共生の姿勢に驚かれることが多かった」と述べた。

また、中国・四国地方での作品、主導した小豆島や島根県雲南市の活性化プロジェクトなどを紹介し、「そこに住んでいる人たち、特に子どもたちといかにプロセスを共有するかが重要。そして、地元の人が楽しんで活性化に取り組めるプログラムであることが大事だ」と話した。

ジャーナリスト安田純平氏は拘束・解放をめぐつて日本ではさまざまな意見が飛び交つてきただが、多くは批判的意見で、自己責任を問つことに集約されている。安田氏本人もおわびと感謝を表明し、自らの非を公にしている。

しかしながら、海外では「国境なき記者団」を始め、安田氏の行動はむしろ称賛されるべきで、謝罪などする必要はないとする意見が大半を占めている。

筆者も、こうした日本の論調や批判が極めて利己的で、閉鎖された社会の中の発想であると考えている。

2018年12月5日

建設通信新聞

ジャーナリス
だとしても、誰
ち入れない悲劇
世界に知らしめ
がある。政府な
だけに頼りきる
ことでもある。海
識者がことごと
疑問視している

「うがいのを得ない。
そのうつした風潮や「常識」
内で起つたさまざまな出来事
も関係している。もとに思
ふ。建築界も同様である。
このKYBのオイルダンパ
の値不正は、数年前の東洋
業による免震ゴム、旭化
の杭工事の不正同様、社
内に大きな衝撃を与えた
のに垣間見えるのは常に
やマーカーなど、不正に
つた当事者だけをターゲ
トし、問題解決を因縁うつ
てある。当事者責任、
は自己責任の問題にしてき

する問題を見なければ、何も事の本質は見えてこないといふことなのだ。当事者が指摘するよりも、むしろ問題を引き起す状況に追いやり、放置してきた業界や企業の構造に潜む問題を指摘しないままで、事後の是正には何も寄りしない。さらに言えば、設計事務所の監理責任検査・監査機関の問題でもあるのだ。このような状況で、品質管理を問うISOは機能していいのだろうか。

立した個が全体を創るのだが、その全体はほとんど誰にも分からぬといつて極めて不条理な構造を持つてゐるからである。だから問題が起これば、当事者の責任に帰すことしかできない構造になってしまっているのだ。こうした構造が、当事者責任、ひいては自己責任論が生まれることの根底にある。全体を見ないで、部分しか見ない、見えない現代社会の構造的問題でもある。

安田氏の問題は、複雑な現代社会に突き付けられた二つの問題であり、ジャーナリズムの役割や社会的貢献に対する問題提